

私の保育



鈴木祐子

私は保育を始めて七年目のこの一年間を、三、四歳児の子どもたちと楽しく過した。かれらは毎日、沢山の素晴らしいものを私に投げかけてくれた。

「言葉」「無言で差し出す手や、私を見つめる言葉以上の視線や動作」「紙や粘土、砂や自然物の作品の数々」である。

自由に遊ぶ子どもたちは、いつも「ごっこ」遊びをしている。小さなワゴンを引っぱる男の子。ワゴンは段々とスピードを増す。始めはワゴンそのままであっても、間もなくそれはタクシーになり、電車になり、バスにもトラックにもなる。砂場でケーキ

を作っているところにやってくると、それはたちまちケーキ屋さんの屋台になり、あちこちへケーキを売り回る。また、自分で「ビーボービーボー」「ウーウーウー」と音を出しては、パトカーや消防自動車になって活躍する。

ジャングルジムはりすの家やロケットにもなり、すべり台は川や別世界行きへのトンネルにもなる。

レストランごっこも砂場や、雨あがりの園庭でよく見られる。子どもたちは自分の好きな動物などにもすぐなってしまう。うさぎ、りす、蝶、蜂、花、犬、ライオン、チーター、猿、きり

ん、きつね……。私は毎日沢山の可愛い動物や猛獣に囲まれて、
る。そして、かれらの誘いや襲撃を心待ちにしているのである。

子どもたちは表現体になって動くことを楽しむ。それにタンバ
リンや鈴、ピアノやレコードで音楽をつけると、一層、喜んで表
現していく。

また歌をうたう時には、その中に歌われている花や動物や乗り
ものなどになって動き出してしまふのである。

このような身体からだの動きを伴う表現を子どもはごく自然に喜んで
行なえるのである。

身体からだを動かして何かを「表現」することは人間の「本能」とも
いうべきもののかもしれない。それは人間が言葉や文字を獲得
する以前から持っているものであり、また今日でも私たちは言葉
や文字の通じない相手には、自分の意志を身振り手振り、つまり
身体からだ（からだ）を使って表現し伝達するのであろう。

太古の人々ばかりでなく現代であっても未開の地に住む原住民
たちは、神に祈ったり、感謝したりする時にはかならず踊りが伴
っている。

つまり身体からだの動きによる表現とは人間にとって原始的かつ根源
的な表現方法であるといえよう。それ故に言葉や文字を持たない

としても、それでは表現しきれないデリケートな感覚は、からだの
動きによって表現し得るのではないかと思える。このことは、乳
幼児においては特に顕著にみられる。かれらは十分な言葉や文字
をもたないが、嫌なことは手足をバタバタさせて嫌がり、嬉しい
ことは飛びあがったり、手をたたいたりして喜びを示し、「不快」
、「快」を表現するのである。

いろいろな表現体になって遊ぶ子どもたちだが、表現される
もの、かれらは、子どもにとって「大好き」なものである。それ
らは「美しいもの」「すてきなもの」「強いもの」「カッコいいも
の」である。それらを子どもたちは、子どもらしい独特の感性で
もって表現の対象としてとらえる。しかし、当初はただ単に子ど
もとその対象物との関係は、M・ブーバーの言う「われ—それ」
というものにしかすぎない。

豊かな感受性を子どもが持っているとするなら、その関係は、
「われ—なんじ」という関係に変わる。すなわち、もしその子ども
に豊かな感受性が育っていないとするなら、いかなるものもただ
単に「それ—もの」にしかすぎない。私たちは子どもが「それ」
を子どもと同じレベルの、いわば人格を持つ「なんじ（汝）」とし
てとらえるよう配慮する必要がある。子どもも、こうした能力を
潜在的に備えているものである。

ごっこ遊びは、瞬間的であったり、流動的であったりする。翌日も続いたり、あるいは何日か経た後でまた始まったりする。

一人の子どもの単独の遊びから参加する子どもが増えていく場合や、初めから複数の子どもたちによって始められることも多くみられる。

表現する内容をみるとやはり、子どもの発達段階に伴って、その領域が広がり、細かい部分をも表現しようとする。

たとえば「電車」を例にあげると、三～四歳児が対象とするものは、単に「電車」であったり、乗る機会の多い「小田急線」、「ロマンスカー」や「新幹線」である。電車ごっこをしていた時に、

G「先生、ロマンスカーと新幹線、どっちが速い？」

私「新幹線の方がずっと速いわよ。」

G「じゃあ、ぼく新幹線！」

と言ってGちゃんは全速力で走っていつてしまった。

それに対し、四～五歳児位になると「電車」の領域が「山の手線」「中央線」と拡がっていき、それらを「各駅停車」「準急」「急行」と分類していく。また車両の数や色なども加わってくる。

更に五～六歳児になると「地下鉄」が加わり、「始発駅」「終着駅」「急行の停車駅」などもあらわれるようになる。

「電車」を絵で表現している状況をみるとまた面白い。三～四歳児では、ただ一本の線が紙面をあちこちに走っている。自分自身とクレヨンが電車そのものになった気分、自由に走り回る。時には、「ダダーンダダーン……」という走行音も伴っている。

四～五歳児になると線は二本になる。そして二本の線の間や両脇に小さな丸が沢山ある。これは、電車の最前部や最後部に乗って下を見た時の光景らしい。その時には確かに二本の線路とその下の砂利が沢山みえる。それらを二本の線と小さな丸で表現しているのである。

五～六歳児になると、横向きの電車が描かれ、車輪の下に線路がきているのである。

子どもたちが自分の世界を自由に展開できる材料の一つに粘土がある。子どもたちは粘土が大好きである。そしてまた私も粘土が大好きである。

友だちと協力して大きな山やハイウェイを砂場で作ること、おだんごやケーキを作ること、大好きではあるが、自分の前に置かれた他人に侵されない自分の粘土、その一塊の粘土を手にし、自分一人の世界で自由に想像を働かせ、創っていくことは大変な魅力なのではないだろうか。

それはまた、土の感触を楽しむという人間が本来的にもっている感覚と共に、砂や泥に比べて、粘土の方が、形にするために容易であり、壊れ難いというような利点がある為とも思われる。

さて、三、四歳児の子どもたちの作品は、造形そのものは稚拙であり、何を表現しているのかすぐには判断がつかねることもあるが、よくよく見ると成程とうなずけるのである。しかも、更によく見るとそれらの作品の一つ一つが今にも動きそうな感じを私に与える程、存在感や生命感に満ちていることに気付く。

小さな両の手の中の粘土を小さなおだんごにし、交互に動かすうちに細長いへびにする。へびの上におだんごを乗せてかたつむりにする。おだんごをたたいてお皿にする。

☆お皿の上にかたつむりがのっていた。

私「かたつむりね」

K「かたつむりさん、雨の日にはっぱのお舟に乗ってくるの。」

☆粘土板の上に沢山のへび

私「沢山できたわね」

M「ぼくしっぱ屋さん。いろんな動物のしっぱ作るの……これはねこさんの、これはライオンさんの……」

私「これは？」

M「ねえ、さるってしっぱがある？」

私「あるわよ」

M「じゃあ、さるさんの、」

ねずみ色の土塊が子どもたちのロマンによって生命を与えられていく様は本当にすてきなことである。そこには、子どもたちが、ごっこ遊びで表現体になりきって遊ぶ時と同様、〈それ〉を〈なんじ〉に変えていく「もの」に注ぐ愛情が感じとれるのである。

子どもたちに刺激されて私も六年前から田畑一作先生に彫刻のご指導を賜わっているが、何回やっても雰囲気はでも子ども作品のような生命感や存在感は出てこないのである。しかし、指導を受ける度に同じ感慨をもって制作に打ち込むのである。

「動き回ってあらゆる方向から見よ。自分が向かったその方向は、一つ一つが正面である。」と、先生は常に言われる。先生のこの言葉を聞いた時、私の頭に浮かんだのは、倉橋惣三の「真向き、横顔、うしろ姿の三態を適宜にとりあわせてこそ、家庭教育の真の要諦がある」という言葉である。何となく心に留めておいたこの言葉であるが、「横顔」や「うしろ姿」に、もっと積極的な意味あいがあり、それらもやはり「正面」なのだということがあらためて痛感した次第である。

一つの方角からだけ観察し彫刻を制作するなら、その方角から

見る限りはモデルによく似たものであっても、少し角度を変えてみると、全く違ったものになるのであろう。つまり一つのもの、把握する為には、あらゆる角度を「正面」としてとらえ、取り組んでいかなければならないのである。

角度は無限に存在する。私が子どもたちと接していく上でこの経験に多くの示唆を得た。とらえやすい一面からだけ見て、その子どもを理解したと錯覚してはいないだろうか。自分の好きな面だけをつい見たがってはいないだろうか。子どもの心との接点は無限にあるのではないだろうか。

もう一つ、理論や方法論を学ぶ以上に田畑先生から学んだものがある。それは先生自らが、制作に打ち込まれる時の真摯な態度と、喜びに満ちた表情である。そのことが、何よりも私に作ることの喜びや楽しさを与えてくれるのである。人を導く人間とは、こうあるべきなのではないかと思った。

また、舞踊家の宮操子先生からも同じようなことを学んだ。先生は、人を導く者は、「常に研究と反省、謙虚と自信がなければいけない」「各個人の心身を見極めて、それに適応した導きでなければならぬ。そこには、常に愛情と明るさと楽しさがなければならぬ。」とよく言われる。先生のお稽古は常にこの通りである。

「教育」(education)という言葉の語源は、ラテン語の *educare* 「引き出す」という意味あいだそうだ。子どもを教育するということは、「教え込む」ということではなく、子どもたちのもっているいろいろな可能性をいろいろな方面から「引き出し」ていくということだと思う。

子どもたちの能力を引き出す為には、子どもたちが、自分で「やりたい」という意欲を伸ばし、自分で考え、自分で行なうのに必要なものを豊かに準備しておかなければならない。と同時に保育者自身も常に心身ともに豊かに準備されていなければならない。

私は保育者として、子どもたちから「引き出し」「育んでいく」べき最も大切なものの一つとして、「生命をいつくしむ心」をここであげておきたい。

先日のこと、子どもたちとお弁当が済んでりんごやみかんの皮をもって動物小屋に行った。その小屋には、兎、鶏、鴨が雑居している。子どもたちはみかんやりんごの皮を各自手にし、金網越しに兎を呼ぶ。

「うさぎさん、ごはんですよ。」

「おいしいみかんがあるよ。」

すると、その声に兎ばかりか、鶏もお相伴にあずかろうと寄っ

てくる。

T 「こら、にわとりあっちいけ！」

と追い返そうとする子どもや黙って手を引っこめてしまう子どももいる。

兎と鶏……鶏に比べ顔つき、走る姿、餌を食べる様も兎の方がずっとチャーミングである。兎の中に片目のつぶれているものがあった。

H 「あ、うさぎさんかわいいそう……」

T 「先生、どうしてうさぎさんこんななっちゃったの？」

私 「鶏につつかれたんですって」

T 「えー!! にわとり悪い。こら！」

私 「どうして鶏は兎をつついたと思う？」

T 「わかんない。」

私 「みんなが兎ばかり可愛がって、兎にばかりごはんあげるでしょう。それで鶏はおこって兎をつついたのではないかしら

……ってそう思うの。」

T 「そうだねえ、にわとりもおなかすいてんだよね。」

H 「にわとりの好きなものなあに？」

私 「そうね、緑の柔かい葉やお野菜……。鶏の好きな草、お庭にもあるわよ。」

H 「とりにいきましよう！」

T 「いこう いこう」

私たちは、はこべを沢山とってきて鶏にもあげた。

自然は多くの生命をこの地上に配置している。そして全ての「生命」は「生きよう」として「生きている」。

人は「好きなもの」(＝愛らしいもの、美しいもの、チャーミングなもの……)を愛することは簡単なことである。そしてあくまでも人間は、「好きなもの」を愛してしまう存在である。「好きなもの」があると「きらいなもの」(＝憎らしいもの、醜いもの……)も存在する。その時の子どもたちの感覚からかれらは、「好き」あるいは「きらい」に分ける。しかしそれらはいずれも「生きとし生けるもの」である。前の例で言うなら鶏の行動には鶏なりの理由がある。子どもたちが「好き」「きらい」と判断するのは一面からだけにすぎない。子どもたちにはいろいろな面から観察する態度を身につけさせていかなければならない。と同時に例え「きらい」なものであっても、「愛する」「気持ちを育てていかなければならないと思う。幸いなことに人間には、また「憎しみ」を「愛」で包み込む能力も備わっているのである。子どもたちの持っている沢山の能力の中で私が「引き出し」ていきたいものは、この「生命をいづくしむ心」なのである。(東京・ゆかり文化幼稚園)